



かかるまえにできること

平成24年(2012)

10月1日(月)

発行所 田辺三菱製薬株式会社  
大阪府中央区  
北浜2-6-18

# 新 ワクチン 新聞

平成24年 秋号

監修:川崎医科大学小児科学 教授 中野 貴司 先生

平成24年秋号のトピックス

- 不活化ポリオワクチンが定期接種に
- 4種混合ワクチンが11月に導入予定
- 特集:知っておきましょう!  
4種混合ワクチンで防げる病気

## 不活化ポリオワクチンが 定期接種に

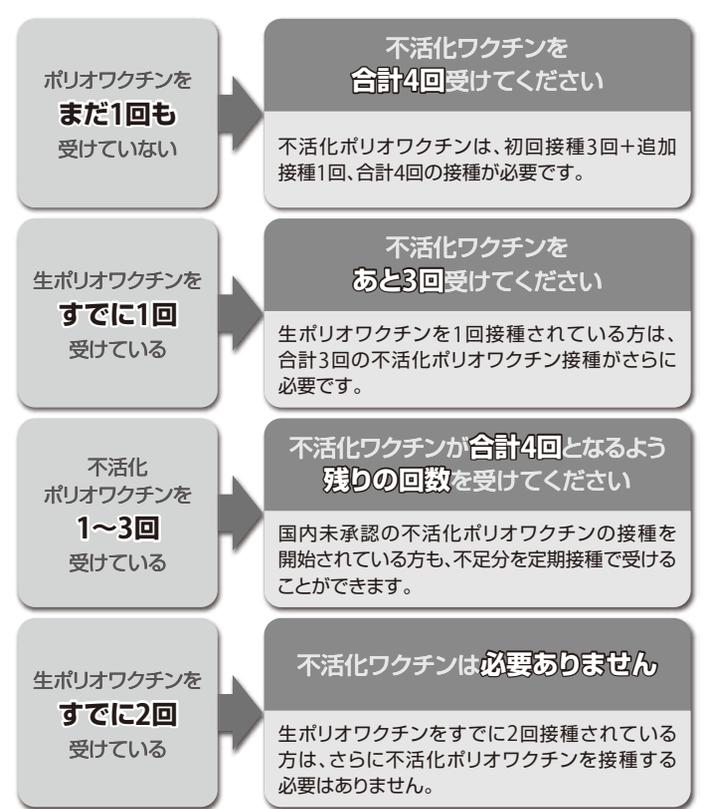
平成24年9月1日より、ポリオの定期予防接種は、経口生ポリオワクチンから皮下注射による不活化ポリオワクチンに切り替わりました。生ポリオワクチンは、ポリオウイルスの病原性を弱めてつくったものです。ポリオに感染したときとほぼ同様の仕組みで強い免疫が出来ます。免疫をつける力が優れている一方で、まれ

## 4種混合ワクチンが 11月に導入予定

定期予防接種で一番最初に接種されるワクチンは、3種混合(DPT)ワクチンです。このワクチンは、初回接種3回、追加接種1回、合計4回の接種により、百日

にポリオにかかったときと同じ症状が出る可能性があります。しかし、9月に導入された不活化ポリオワクチンは、ポリオウイルスを不活化(＝殺し)、免疫をつくるのに必要な成分を取り出して病原性を無くしてつくったものです。ウイルスとしての働きはないので、ポリオと同様の症状が出るという副反応はありません。不活化ポリオワクチンは、初回接種3回、追加接種1回、合計4回の接種が必要です。すでに生ポリオワクチンや、不活化ポリオワクチンを接種した方は、今後の接種スケジュールに注意が必要です(図1)。詳しくは、かかりつけの医療機関・医師、お住まいの市町村にご相談ください。

図1 不活化ポリオワクチンの接種方法(4種混合ワクチン導入まで)



### 3種混合ワクチンは従来通り受けてください

- 使用する不活化ポリオワクチンは、単独の不活化ポリオワクチンです。
  - 不活化ポリオワクチンは、初回接種として20日以上の間隔をおいて3回、追加接種として初回接種終了後6ヵ月以上の間隔をおいて1回、合計4回の接種が必要です。
  - 追加接種とは、生・不活化を問わず、全体を通して4回目となるポリオワクチンです。
- ※平成24年9月1日の導入時点では、4回目の追加接種は定期接種対象外です(現在、国内臨床試験を実施中のため、データが整い次第導入予定)。

厚生労働省ホームページより

ジフテリアは、ジフテリア菌に感染したひとの「せき」や「くしゃみ」などでジフテリア菌が飛び散り、それを吸い込むことで感染します。症状は発熱、嘔吐、のどの痛みや犬がほえるようなせきが出るのが特徴ですが、感染しても10%程度の人にしかその症状は現れません。しかし、発病2~3週間後ぐらに、菌の出す毒素により

せき、ジフテリア、破傷風の3つの病気を予防することが出来るワクチンです。

厚生労働省によれば、現在、DPTワクチンに不活化ポリオワクチンを加えた4種混合ワクチンが定期接種化されるよう、準備が進められています。この4種混合ワクチンは、ポリオ、DPTのいずれのワクチンでも接種歴がない人が接種対象となる予定です。

知っておきましょう!

## 4種混合ワクチンで防げる病気

11月には、4種混合ワクチンが定期接種化される予定です。4種混合ワクチンで防げる病気は、ジフテリア、破傷風、百日せき、ポリオの4種類です。日本では近年、ワクチンを接種することで予防され、流行がみられていませんが、感染すると重症になり得るおそろしい病気です。ワクチンで防げる病気は、ワクチンで予防しましょう。

表1 DPTワクチンで予防できる3つの病気

- ジフテリア (Diphtheria)
- 百日せき (Pertussis)
- 破傷風 (Tetanus)

心筋炎や神経麻痺などを起こすこともあります。1945年には約8万6千人の患者数(その約10%が死亡)が報告されていますが、現在では大きく減少し、1991年から2000年の患者報告数は21人(死亡2名)でした。

破傷風は、破傷風菌が体内に侵入し、菌が増殖する際に産生する神経毒素により強直性けいれんを引き起こす病気です。破傷風菌は「芽胞」という形で土壌中に広く常在しており、事故などで外傷を負った際に傷口から芽胞が侵入して感染を引き起こします。人から人に感染することはありません。発症時の致死率は20%以上ともいわれており、新生児や高齢者では重症化をおそれがあります。多くの人は予防接種により基礎免疫をもっていますが、高い免疫状態を維持するには10年に1回の追加接種が望ましいといわれています。

百日せきは、百日せき菌が鼻咽頭や気道を通して感染する病気であり、長期にわたってせきが続くことが特徴です。子どもは、母親からの免疫(移行抗体)では百日せきを防ぐことができない上に、新生児や乳児では無呼吸発作やチアノーゼ(呼吸ができず酸素が欠乏している状態)を生じ、重症化しやすいため注意が必要です。近年では成人での集団発生が報告されており、成人から新生児や乳児への感染が懸念されています。免疫を早く獲得することが大切ですので、日本では定期接種として最初に接種するワクチンのひとつとして位置づけられています。

ポリオ(急性灰白髄炎)は、ポリオウイルスが口から入り、のどや腸内で増殖する感染症です。9割以上の人は症状がなく(不顕性感染)、4~8%の人は「かぜ様症状(発熱、頭痛、嘔吐など)」が現れます。しかし、ポリオウイルスが脊髄や脳へ到達すると、その部分の細胞が破壊され、麻痺の症状を引き起こすこともあります。特に5歳未満の子どものかかりやすさ、広く「小児麻痺」として知られています。わが国では、1980年以降は野生株によるポリオ患者は報告されていませんが、海外では今もなおポリオウイルスが排除されていない国もあります。

年4回の発行を予定しています(次回は、2012年12月発行予定)

